

# 学会自由「求め山陰の研究者が声明

## 「学会の自由」求め山陰の研究者が声明

菅首相が行った日本学術会議会員の任命拒否に危機感を持った山陰両県の研究者らでつくる『学問の自由』を求める山陰地域の研究者ネットワークは4日、任命拒否の撤回と「学問の自由」を守る声明を発表しました。同ネットワーク事務局の関耕平・島根大学文学部教授、高山寿雄・鳥取大学医学部元教授ら11氏が松江市内で記者会見し、研究者や市民、学生に賛同を訴えまし

菅首相が行った日本学術会議会員の任命拒否に危機感を持った山陰両県の研究者らでつくる『学問の自由』を求める山陰地域の研究者ネットワークは4日、任命拒否の撤回と「学問の自由」を守る声明を発表しました。同ネットワーク事務局の関耕平・島根大学文学部教授、高山寿雄・鳥取大学医学部元教授ら11氏が松江市内で記者会見し、研究者や市民、学生に賛同を訴えまし

# 被爆者とともに進む政治を今こそ

1月23日、核兵器禁止条約が発効した翌日、被爆2世のKさんから話を伺いました。「被爆した母は私の前に2人



大平よしのぶ 前衆議院議員  
アツク やさしく

の男の子を産んでいた。でも二人とも全身紫色で産まれ直後に内出血で亡くなった。墓参りの時にいつも母は言う。「2人がお母ちゃんの中にあった原爆の毒を出してくれたけえ、今も元気でいられる。ありがとう、でもごめんねえ」と。核兵器がいかにむごい結果をもたらすのか。やっぱ涙なしには聞けません。影をも骨をも焼き尽くし、放射線被害が世代を超えて苦しめ続ける、人類とも地球とも共存しえない核兵器。国際社会がそれに「悪の烙印」を押し違法化させて、その巨大な意義を改めてかみしめています。

1946年1月、核兵器廃絶をうたった国連総会決議第1号が採択されて以来、国際社会は核なき世界の実現へ着実に歩みを進めてきました。「ここでは核兵器を使ってはならない」と60年代初頭から南極条約、宇宙条約、海底非核化条約などが立て続けに発効され、さらに中南米、南太平洋、東南アジア、アフリカ、中央アジアと5つの地域で非核地帯条約が発効されました。

その他の地域でも各国の努力が行われています。ソ連があった頃、国内に核兵器が配備されてきたカザフスタン、ウクライナ、ベラルーシは独立後、核を放棄。スウェーデン、ノルウェ

ともに、市民にも広く知らせていくシンポジウムに取り組みすることなどを発表しました。

衆院中国ブロックの議席奪還、政権奪取を  
「5つの改革」で希望のもてる新しい日本へ

**日本共産党 演説会**  
2月23日(火) 午後1時から  
午後2時20分まで  
YouTube「日本共産党」(JCP MOVIE)で配信

**志位和夫**  
委員長がお話しします

衆院 比例代表は「日本共産党」と

自宅のパソコン・スマホを使って YouTube で見ることができます (スマホの場合は契約・料金プランによって、別途料金がかかることがあります)

日本共産党中央委員会ホームページ下の「JCP MOVIE YouTube」から視聴できます。

# 新春対談



黒い雨訴訟・全面勝訴 報告集会 (2019年7月29日)

大平 続いてジェンダー平等社会の実現の課題です。日本共産党は昨年の第28回党大会で綱領を一部改定し、「ジェンダー平等社会をつくる」と明記するとともに、当面の政治任務から日常の党活動に至るまで、その全体にジェンダー平等の視点を貫くことを決めました。

米山 共産党は地域の活動でも地方議員さんに女性が多く活躍されていますね。「ジェンダー平等」という言葉は、1995年の北京で開かれた第4回世界女性会議から本格的に使われ始めた言葉ですね。「自分らしく生きる」願いや運動のなかで、男性と女性だけでなく、性によるあらゆる差別をなくし、多様性を認めようという考え方として発展してきたものです。職場や家庭、地域でも「女がなを」という風潮が強かった時代から、女性だけ25歳定年、30歳定年制があったり、結婚退職制、賃金差別、「男は仕事、女は家庭」という役割分担はおかしい、と勇気をもって声をあげてきました。こうした先輩たちの取り組みが、意識も制度も少しずつ変えてきたのだと思います。

大平 先日、新聞によく入っているマンション広告を見ていたら、「ママ楽キッチン」とか、「ママ楽ランドリー」と書いてありました。すごい違和感でした。「台所なら僕も立っているんですけど」ってね。

米山 家族みんなのお弁当も作っていますよね。

いのちと暮らしを守り、平和とジェンダー平等をめざす政権を③

# 米山淳子 大平喜信

米山淳子(よねやま・あつこ)さん 1959年東広島市生まれ。日本女子大学(社会学部)女子学生時代の就職難など学生運動をへて1986年新日本婦人の会中央本部へ。新婦人しんぶん編集部、『新婦人情報』編集長、運動・しんぶん委員会責任者。原水爆禁止日本協議会代表理事、日本婦人団体連合会副会長。

大平 日常にあるものも材料にしてみんなで「ジェンダー平等とは何か」を考えていきたいですね。

米山 千葉の佐倉にある国立歴史民俗博物館が昨年、「性差(ジェンダー)の日本史」という企画展を行い、話題をよびました。実際に観にいきましたが、古代では農耕作業や地域の集いに男女が同じように参加していて、卑弥呼だけではない女性首長がたくさんいたこと、7世紀末頃、中国から律令制度を取り入れ、税金の仕組みや人々を管理する国家制度をつくっていく中で権力者が都合のいいように男女の役割分担意識を植えつけ、やだんだんと女性が政治や公的部門から排除してきたことが昔の木簡や埴輪などさまざまな資料からよくわかりました。

大平 企画展が開かれたことを含め数年で大きくジェンダー問題への関心が高まり政治の課題にも押し上げられてきました。昨年はフラワーデモが全国に広がり、中国5県でも行われ性暴力の実態を社会に可視化しました。広島でも裁判がたたかわれていく選択的夫婦別姓の実現を求めている運動が動かれています。私も広島でDV被害者の支援センターや性暴力被害ワンストップセンターに初めて伺い、支援員の拡充や相談室の確保など政治への要望を聞きました。

米山 フラワーデモのような新しい運動と新婦人も結び合い、お互いにつながりながら、新しい出会いが広がっています。新婦人のツイッターを見て「私も何か行動したい」「ジェンダーについて学びたい」「仲間とつながりたい」と入会の問い合わせもあるんですよ。(続く)